B 私の好きなスポーツ

横浜国立大学　教育人間科学部
教授
海老原　修

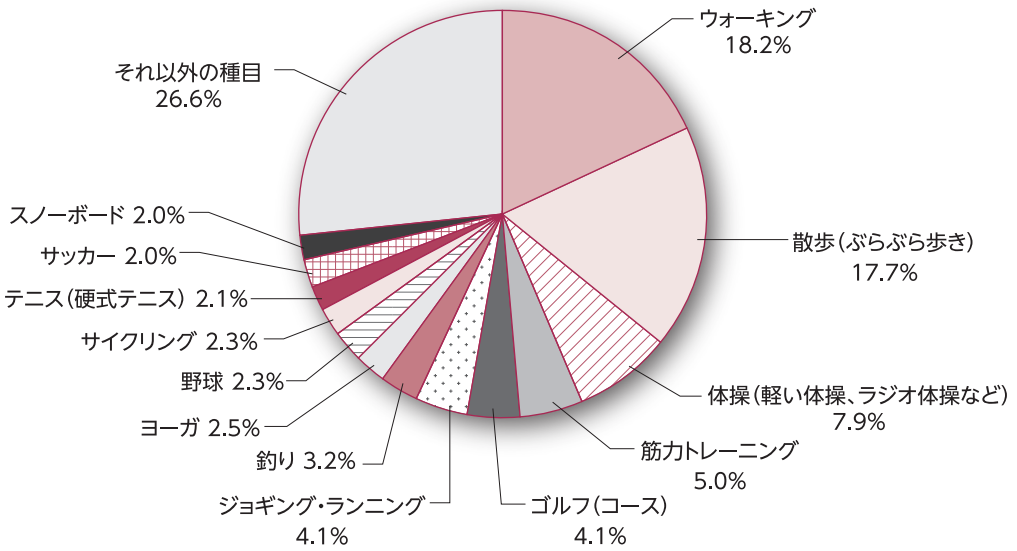
はじめに

本調査では私の好きなスポーツ（My Favorite Sports）をたずねた。春夏秋冬に応じた歌がしばしば取りざたされ、時節に似合う歌がMy Favorite Songとして定番となる。夏ならば盛夏や晩夏に、冬ならば初冬や厳冬にそれぞれ選ばれる。時節をさらに絞った卒業やクリスマスといったシーズンヴァージョンもある。そこでは童謡、歌謡曲や演歌、ポップスやジャズ、クラシックなど、ジャンルは広く、洋の東西も問わない。

注目すべきは選ぶという行為である。それは比較対照となる複数の歌や曲が所与の条件として用意される中で、個々人のライフヒストリーにおける聞き比べと嗜好を経て、My Favorite Songが指向される。試聴ではなく幾度となく反芻され、個々の趣味が共有されるからこそ定番として人口に膾炙される。はたして、スポーツは歌ほどにわれわれの生活に浸透しているのであろうか、と問うならば、この視点はスポーツライフのあり方をただす視点を呈示する。

B-1 私の好きなスポーツ（My Favorite Sports）

調査票の問1に回答した1,473人は問2に進み、運動・スポーツの具体的な内容を答える中に「行った運動・スポーツの中で大切だと思う順位をつけてください」という設問を用意した。5つの回答欄に原則1位から5位を記す。**図B-1**は私の好きなスポーツ（My Favorite Sports）の1位を示した。問1に回答したが問2に回答しないケースや甲乙付け難く複数の回答欄に同位と回答したケースを除外した有効回答件数は1,449人となる。1位「ウォーキング」（18.2%）、2位「散歩（ぶらぶら歩き）」（17.7%）、3位「体操（軽い体操、ラジオ体操など）」（7.9%）がベストスリーで、次いで「筋力トレーニング」（5.0%）、「ゴルフ（コース）」（4.1%）、「ジョギング・ランニング」（4.1%）と続く。一人で行える個人的なスポーツが続き、対人競技やチームスポーツは9位「野球」（2.3%）、11位「テニス（硬式テニス）」（2.1%）、12位「サッカー」（2.0%）であった。



【図B-1】私の好きなスポーツ（n=1,449）

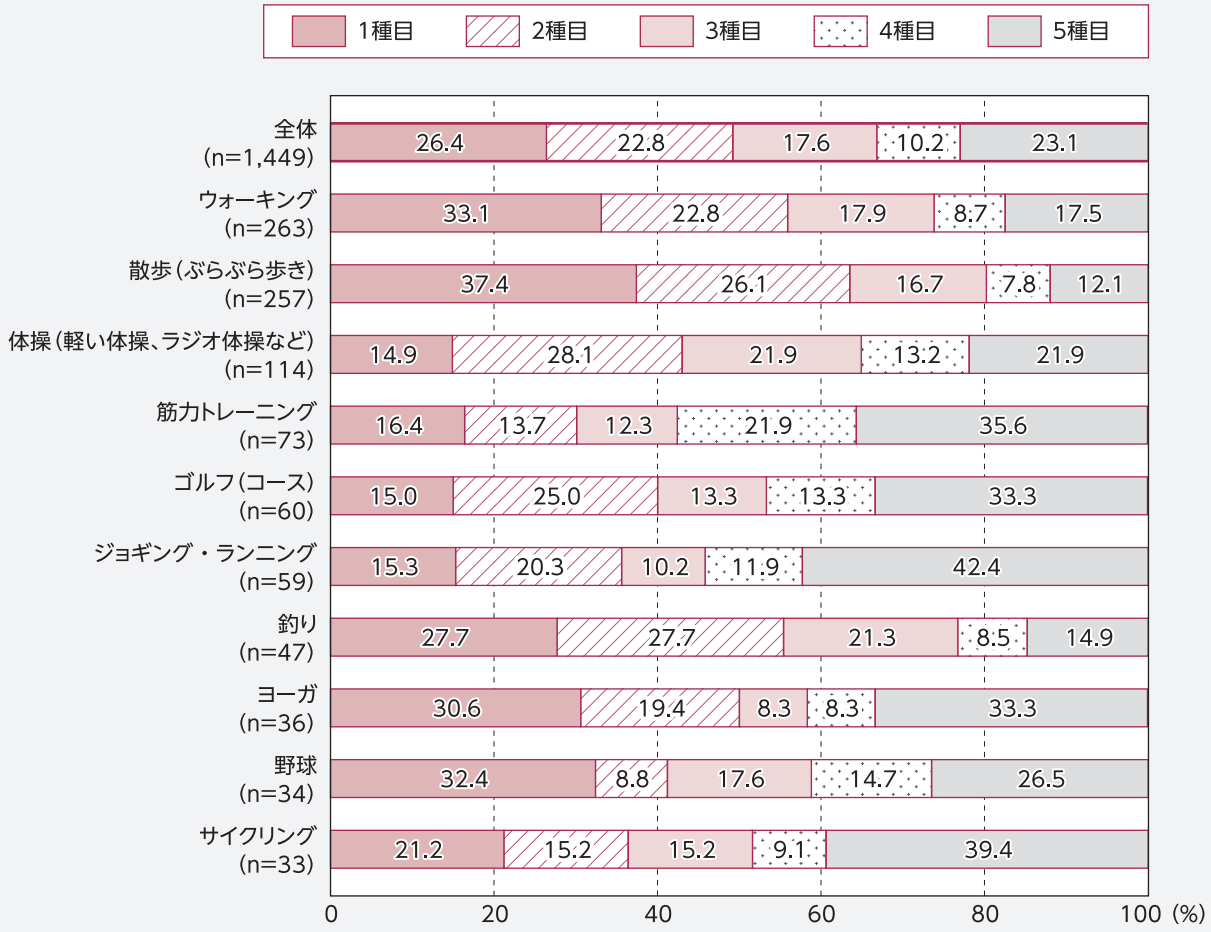
資料：笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2014

B-2 比較選択からみる私の好きなスポーツ（My Favorite Sports）

社会的な行動を分析する社会的交換理論（Social Exchange Theory）では、第1段階に費用便益分析、第2段階に最低満足水準、第3段階に選択比較水準が設定される。投資に比べる利潤の良し悪しが行動を決定するとは限らず、満足できない水準の行動が選ばれる場合もあるが、選択される行動の最終段階での判断材料は比較する選択肢の有無である。効率が悪くとも、また満足できなくとも、比較選択を通じて選りすぐられた行動を人は選択する。ステップを逆説的にとらえるならば、2つ以上の選択肢があれば、その前段階で、より効率の良い、より満足が満たされる条件を選択していると期待される。がしかし、2つの選択肢に準備される効率の良し悪しと満足の高低から構成される4パターンから、より効率の良い、より満足が満たされる条件が選択されるとは限らない。だからこそ、肝腎なポイントは選択する行為こそが豊かさを保障していると考えてもよい。

私の好きなスポーツ（My Favorite Sports）に選ばれたベスト10ごとの問2の回答選択数（「よく行った」運動・スポーツの数）を**図B-2**に示した。選択比較が用意されない条件と判定できる1種目が26.4%と全体の1/4を占めた。「よく行った」種目が過去1年間に1種目にとどまる条件の中で選出される第1位をいかに理解すべきか、興味深い結果である。さらに、二者択一となる2種目を加えると5割に迫るが、一方で、5種目の回答もまた23.1%と全体の1/4近くに達し、スポーツの多様性に二極化が生じている。

したがって、1種目と5種目が占める割合に注目すると種目特性を見出せそうだ。1種目の割合が高いのは「散歩（ぶらぶら歩き）」（37.4%）、「ウォーキング」（33.1%）、「野球」（32.4%）で、5種目では「ジョギング・ランニング」（42.4%）、「サイクリング」（39.4%）、「筋力トレーニング」（35.6%）となった。「散歩（ぶらぶら歩き）」や「ウォーキング」はさまざまな運動・スポーツと連携したり、これらを基礎に発展したりする基盤的な運動ではないのかもしれない。この視点では「ジョギング・ランニング」「サイクリング」「筋力トレーニング」がさまざまな運動・スポーツの基盤となりうる多様性を生み出す比較選択を経て、私の好きなスポーツ（My Favorite Sports）に選出されていると仮定すると両者には質的な差異が確認できる。



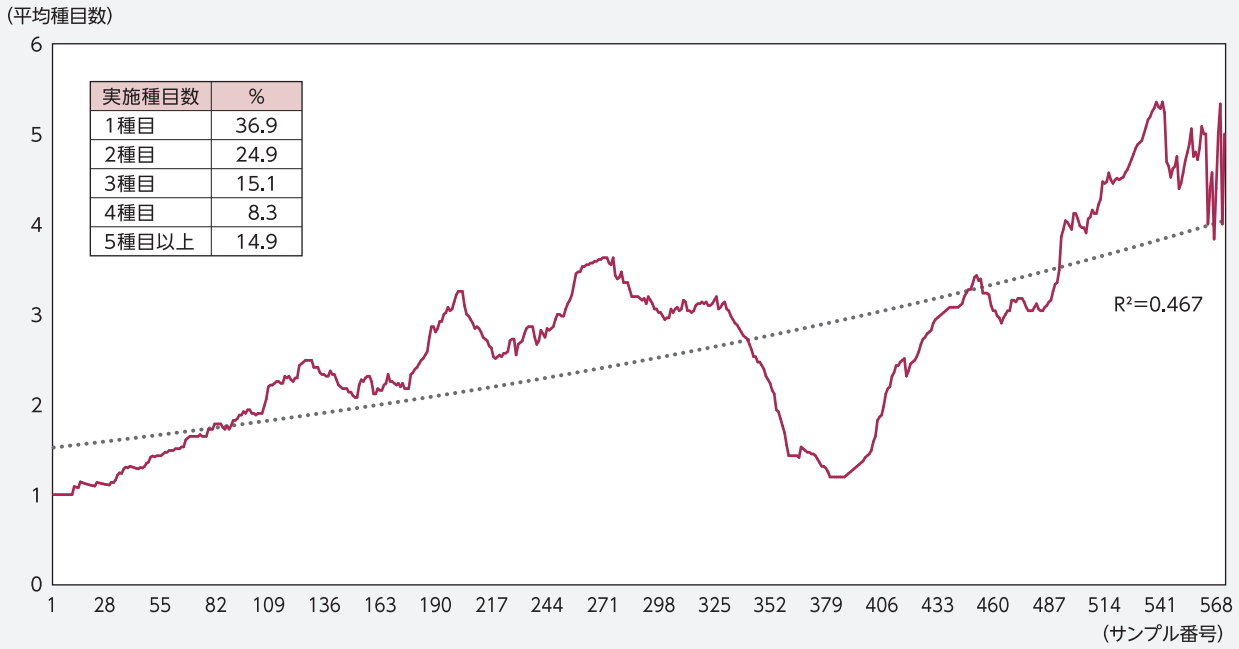
【図B-2】私の好きなスポーツ種目別にみる「よく行った」運動・スポーツ実施種目数の割合

資料：笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2014

このような仮説を検証するべく、運動・スポーツ実施レベル別に実施頻度と種目選択数の散布図を準備した。**図B-3**、**図B-4**、**図B-5**、**図B-6**には、①問2に基づき算出した年間実施頻度を横軸に、問1で回答した運動・スポーツ種目の合計数を縦軸に配置した後、②両者の関連を視覚的に把握するべく、横軸上で隣り合う51サンプルの運動・スポーツ種目合計数の平均、すなわちスムージングの手法を援用してプロットし、③直線回帰式に基づき分散の説明力を算出した。折れ曲がる変異点の数+1の次数で説明力は極大に増すが、直線（1次）回帰式でもレベルの上昇にしたがって0.467、0.499、0.488、0.635と十分に説明できる。平均値をたどる線分は「レベル1」や「レベル2」では漸近線を、「レベル3」や「レベル4」では右肩上がりの直線を描き、運動・スポーツ実施頻度が増すほどに多様な運動・スポーツに接する現状を視覚化する。その背景には前述のとおり、運動・スポーツ種目数の選択肢が1種目にとどまる対象者が、運動・スポーツ実施頻度とレベルの上昇にしたがって減少し、相対的に複数の種目選択の割合が上昇するからである。

これらの特徴をより明らかにするために、「レベル1」(n=518)、「レベル2」(n=197)、「レベル3」(n=375)、「レベル4」(n=365)を母数とするサンプルを抽出し、選出される種目数を比較した。レベルが高いほど5種目以上が占める割合は高く、レベルが低いほど1種目と2種目のそれが高くなる。

豊かなスポーツライフとはいかなる状況を指すのか、と問うならば、さまざまな運動・スポーツを体験し味わう中で、自分の好みに合った運動・スポーツを選択する。それは個々人のスポーツライフヒストリーの中で選出される。このようなスポーツ多様性が保障されて初めて私の好きなスポーツ（My Favorite Sports）が選りすぐれる。

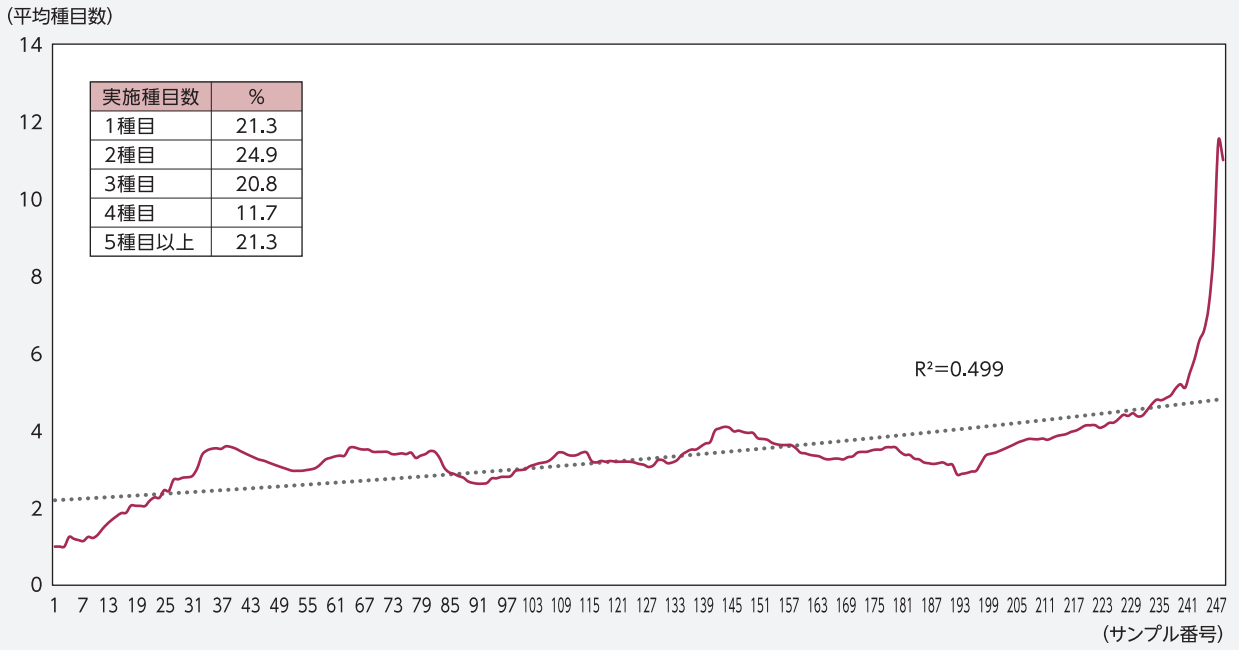


実施種目数	%
1種目	36.9
2種目	24.9
3種目	15.1
4種目	8.3
5種目以上	14.9

【図B-3】年間実施頻度と平均種目数との関連(レベル1:n=518)

注1) 年間実施頻度を昇順に並べ、隣り合う51サンプルの平均種目数をプロットした。
注2) ただし、サンプル番号1～50までは1～50サンプル、519～568までは50～1サンプルの平均種目数。

資料:笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2014

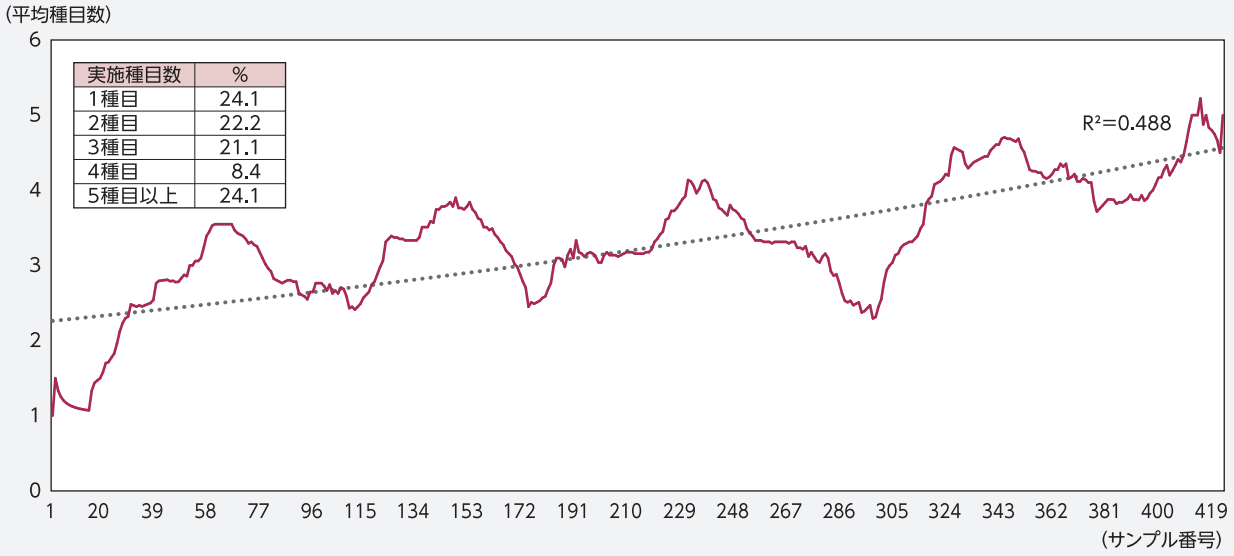


実施種目数	%
1種目	21.3
2種目	24.9
3種目	20.8
4種目	11.7
5種目以上	21.3

【図B-4】年間実施頻度と平均種目数との関連(レベル2:n=197)

注1) 年間実施頻度を昇順に並べ、隣り合う51サンプルの平均種目数をプロットした。
注2) ただし、サンプル番号1～50までは1～50サンプル、198～247までは50～1サンプルの平均種目数。

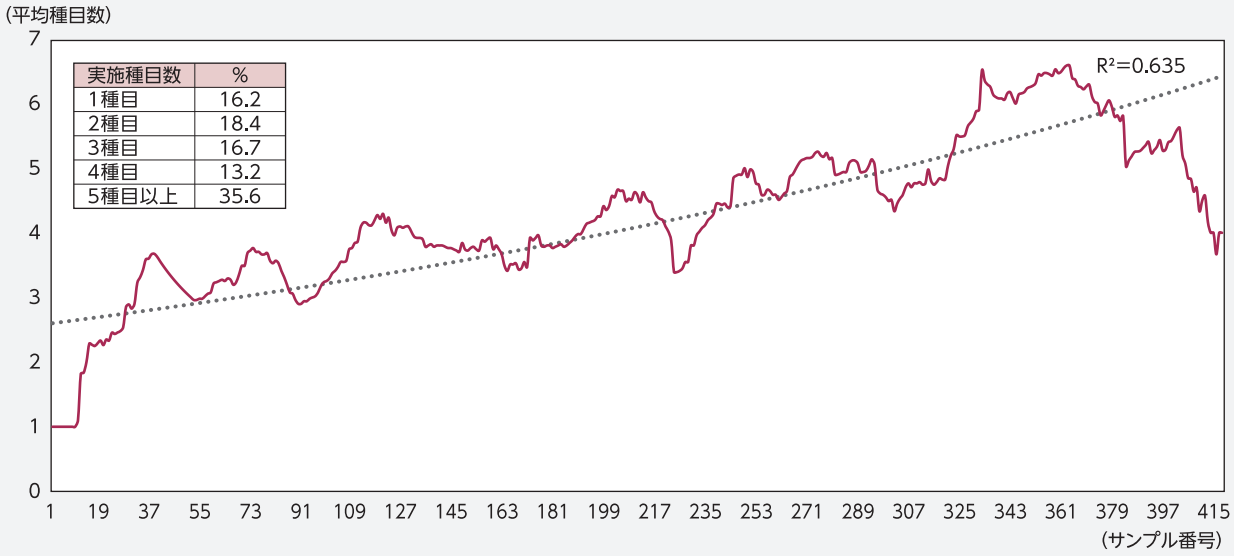
資料:笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2014



【図B-5】年間実施頻度と平均種目数との関連(レベル3:n=369)

注1) 年間実施頻度を昇順に並べ、隣り合う51サンプルの平均種目数をプロットした。
注2) ただし、サンプル番号1～50までは1～50サンプル、370～419までは50～1サンプルの平均種目数。

資料:笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2014



【図B-6】年間実施頻度と平均種目数との関連(レベル4:n=365)

注1) 年間実施頻度を昇順に並べ、隣り合う51サンプルの平均種目数をプロットした。
注2) ただし、サンプル番号1～50までは1～50サンプル、366～415までは50～1サンプルの平均種目数。

資料:笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2014

まとめ

運動・スポーツにまったく接しない者は2,000人中26.4%、527人にのぼる。さらに運動・スポーツに接する者1,449人中、「よく行った」スポーツが1種目だけの者は26.4%、381人を、2種目を行う者は22.8%、327人を数える。過去1年間がライフヒストリーに占める比率はごくわずかかもしれず、現況が狭隘な選択肢にとどまると断定できないが、それでも選択肢の少なさから選出された印象は拭い去れない。My Favorite SportsがMy Favorite Songに比肩できるようなスポーツ多様性の保障こそ、豊かなスポーツライフ社会が実現していると考えたい。